

大阪教育会

令和7年
12月1日 第109号

日本教育会大阪府支部

題字揮毫 中 畔 肇
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町 7-11
たかつカーデン (大阪府教育会館) 408号
(TEL 06-6768-5552)
(FAX 06-6777-3121)

提言



生成 AI 時代の 教育センターの在り方

大阪府教育センター 所長
三宅 恭子

近年、教育を取り巻く環境は急速に変化しており、教職員にはこれまで以上に高度な専門性と柔軟な対応力が求められています。子どもたちの多様な学びを支えるためには、教職員自身が継続的に学び、資質・能力を高めていくことが不可欠です。

大阪府教育センターでは、教職員の資質向上を支援するため、人材育成支援やカリキュラム・マネジメント支援、調査・研究開発など、現場のニーズに即した取組みを展開しています。これらの取組みに加え、今年度より新たな情報発信の手段として、教育センター公式SNS「note」を開設いたしました。研修担当室が、研修のねらいやポイントを分かりやすく紹介し、受講者募集や実施報告を通じて、教育センターをより身近に感じていただけるよう努めています。

さらに、近年急速に注目を集めている生成AIの教育分野における活用の在り方についても、教育センターとして検討を進めています。普段利用する検索エンジン等にも生成AIが組み込まれているため、既に一定数の子どもたちが何らかの形で生成AIに触れていることは想像に難くありません。文部科学省のガイドラインにおいては、「生成AIは使い方によって人間の能力を補助、拡張し、可能性を広げてくれる有用な道具にもなり得ることを理解した上で、発達の段階や情報活用能力の育成状況に十分留意しつつ、リスクや懸念に対策を講じた上で利活用を検討すべきである。」とされています。加えて、生成AIは、教材作成の効率化、授業準備の支援、校務の省力化など、教職員の業務を支える有力なツールとなり得ます。一方で、情報の正確性や著作権、個人情報の保護など、学校現場での活用にあたって慎重な対応が求められます。教育活動においては、その目的を達成するために、生成AIを効果的かつ適切に活用することが重要です。

学校現場が混乱したり、不安を感じたりすることなく、学習指導要領に示す資質・能力の育成に向けて適切に生成AIと向き合い、利活用できるようにしていくには、好事例を学校現場に届けていく必要があります。教育センターとして、今後も学校現場との連携を深めながら、こうした仕組みの構築を継続的に展開してまいります。



総合教育センターでの 産官学連携の展開

大阪市総合教育センター 所長
富山 富士子

大阪市総合教育センターは、昨年4月に大阪教育大学天王寺キャンパス内「みらい教育共創館」へ移転し、「教員の総合バックアップセンター」として新たな取り組みを進めています。その一環として、多様な企業や大学等と連携する仕組み「OEN (Osaka city Education Network: オーエン)」を構築し、大阪市の教育を応援してくださる企業や大学等の専門的知見を各学校園で活用できるよう取り組んでいます。

今年9月には、OENの取組として「未来の学校を考えよう」というテーマで授業を行いました。市内の小学校5年生が1学期に探究的な学習に取り組み、その成果を活かして「みらい教育共創館」の「未来型教室」で未来の学校について考えを深めました。

この授業は大阪教育大学のご協力のもと実現し、子どもたちは、小学校5年生が主人公となった冒険映画をテーマに生成AIが制作したポスターや主題歌、未来型教室の壁一面に映し出された太陽系の映像、オーケストラのVR映像など、最新のテクノロジーを体験しました。その後、大学生によるサポートを受けながら意見を出し合い、未来の学校について発表しました。授業の最後には、VRで体験したオーケストラの演奏を実際の楽器による生演奏でも味わうという貴重な機会も得ることができました。

1学期の探究活動の際に「未来の学校にはAIやVRルームがあるだろう」と予想していた児童もおり、みらい教育共創館での体験後には、「これまで遠い未来に感じていたことも身近に感じられるようになった」「今度はVRで海外を体験してみたい」「VRのオーケストラも素晴らしいかったが、生の演奏の音色も美しかった」など、さまざまな感想や気づきが寄せられました。子どもたちはバーチャルな学びの感動とともに、リアルに体験することの大切さも実感している様子でした。

OENには現在、250を超える企業や大学が登録くださり、学校園や未来の大阪を担う子どもたちへの支援のネットワークが広がっています。今後も総合教育センターは産官学連携のハブとして、先生方一人一人の良き伴走者となるとともに、大学キャンパス内という立地を生かして、キャリア教育や探究的な学びの拠点として、子どもたちの笑顔や可能性を引き出す活動を推進してまいります。

提 言



幼保小連携の深化に向けて

堺市教育委員会
教育センター所長

井 村 美 穂

堺市では、幼児教育の質の向上に向け「幼児教育センター」を設置し、市内すべての就学前教育・保育施設を対象とした「研修」「助言・相談」「研究・情報発信」「幼保小連携」に取り組んでいます。幼児教育アドバイザー等の派遣を通じた園内研修支援や巡回相談の実施、公立施設を中心とした研究実践の発信、保育者同士の情報交換やミドルリーダーの育成等、様々な事業を展開しています。

特に、小学校と就学前5歳児との交流事業や、教育課程の相互理解や支援を要する子どもの情報交換を行う合同研修会など、幼保小連携に力を入れてきました。現在は、5歳児から小学校1年生の2年間を一体的に捉え、育みたいこどもの姿を中心に据えた連続性のある指導をめざし、「架け橋期のカリキュラム」の作成に取り組んでいます。公民問わず特色ある教育・保育を行っている多数の就学前施設と小学校が連携することは簡単なことではありません。

カリキュラム作成を目的化するのではなく、各小学校と就学前施設のグループ化を進めながら、相互参観を行ったり、共に指導案の検討を行ったりと、話し合いや実践を重ねるプロセスのなかでカリキュラムの検討ができるよう留意しています。

幼保小の連携が施設間の交流レベルから、カリキュラムの検討レベルまで進んだのは、やはり、幼稚園教育要領等の3要領・指針の整合が図られ、小学校以降の学びへつながる資質能力や「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」など共通の理念が示されたことが大きく、あらためて、どのような施策においても「理念の明文化とその浸透」が重要であると感じています。

幼児教育は、生涯にわたる学びの出発点です。教育関係者がその価値を共有し、連携を深めることで、子どもたちの未来をより豊かに育むことができます。本市では、小中学校等を対象にした研修や科学教育の推進等を担う教育センターの中に幼児教育センターがあることで、例えば、公開保育に小中学校籍の指導主事が参加したり、STEAM教育の研修に就学前施設の教職員が参加したりと、幼小接続の視点で互いに学び情報共有しています。今後も、このような体制の利点を生かし、新たなアイデアや協働を生み出せるよう努めたいと思っています。

抱 負



子ども・保護者・地域とともに

岸和田市立大宮幼稚園 園長

石 井 かおり

今年度新任園長として岸和田市立大宮幼稚園に着任し、はや半年が過ぎました。赴任した最初の頃は、何から頑張ればいいのか…と手探りのような感覚でしたが、園長という職務に重責を感じながらも、今自分ができる精一杯のことを頑張っているという思いで日々過ごしてまいりました。そのような中、子どもたちが「おはようございます！」と元気に登園し、幼稚園

での活動を終えて「先生、さようなら。また明日！」と笑顔いっぱいに降園した後、迎えに来てくれた保護者と「今日な、Aちゃんと一緒に〇〇して楽しかった！」と会話をする姿を見ることがあります。そのたびに、子どもたちが毎日安心して充実した生活を過ごすことができる園運営を進めていくことが自身の役割であると改めて感じています。

大宮幼稚園の年間行事で特徴的なものが、12月に行われる音楽会です。これは、地域のホールを会場として貸し切り実施しています。子どもたちが主体となって取り組み、練習を積み重ねていくものですが、大きな舞台上でスポットライトを浴びながら歌や合奏やダンスを披露することは、子どもたちにとって貴重な経験となっており、一人一人の確かな成長を感じる機会でもあります。また、実際に運営に関わっていく中で、保護者や地域の方々の支援や協力があってこそその音楽会でもあり、現在に

至るまで幼稚園に携わってきた様々な方々の多大な苦労や貢献を感じ、私自身、気持ちが引き締まる思いです。

さらに、公立幼稚園として大切にしている遊びを通して“学びの芽”を育む教育であったり、地域との関わりであったり、岸和田市の大きな特色である併設幼稚園としての小学校との連携であったりと、時代や社会のニーズは変わっても、これまで培ってきた幼稚園教育は不変的なものであり、継承していくことが大切であると考えています。そして、子どもが生き生きと園生活を楽しみ望ましい発達を保障していくには、そこに関わる教職員も生き生きと保育を楽しみ、互いに連携をしあいながら教育活動を進めていくことが必要不可欠であると思います。微力ではありますが、子ども・教職員・保護者そして地域や他校種の方々をつなぐ架け橋としての役割を大切にしながら園運営に努めてまいります。

抱負



自分が好き、友だちが好き、
学校が好きとみんなが思える学校に

八尾市立永畑小学校 校長

上 出 仁 美

今年度より、八尾市立永畑小学校に校長として着任いたしました。昨年度までの12年間は、大阪府教育センター人権教育研究室に勤め、人権教育研修で多くの教職員の方々から人権が尊重された学校づくりの実践を学ばせていただきました。また、いわゆるマイノリティの立場の方々ともたくさん出会い、身を削りながら語られたその思いに

もふれ、子どもたちが生きるこの社会を教育の力でよりよくしていくための道しるべを自分の中に得ることができました。

一方、この間のコロナ禍での急激な変化の最中に学校現場にいなかったため、子どもを取り巻く学校の「今」について知らないことがたくさんあるとも感じつつ、不登校や遅刻しがちな子ども、個別の支援を必要とする子ども、周囲とつながることが難しい子どもがさらに増え、その背景にコロナでの数年間の経験不足等の深刻な影響も感じる日々です。

年度当初、私は学校のビジョンとして、「自分が好き、友だちが好き、学校が好きとみんなが思える学校に」という目標を教職員に示しました。どんな課題を抱える子どもであっても自己肯定感を持ち、仲間とつながり、安心できる学校としていきたい。そしてそれは、子どもだけでな

く、保護者や地域、教職員も含めて永畑小学校にかかわる多様な人々にとってもそうでありたい。特に教職員が自分の「もちあじ」を否定されることなく、よりよい永畑小学校をつくるために役に立っていると実感してもらいたいという願いを込めました。

幸いにも、本校には子どもの思いを聞き取り、力を惜しまず取り組む多くの教職員の姿があり、勇気づけられている日々です。そんな教職員が自身もウェルビーイングを感じることができ組織づくりを校長として今後も進めていく所存です。

毎日門に立ち、朝の挨拶をしながら子ども一人ひとりに声掛けをしています。その表情や様子から見える子どもの生活に思いをはせながら、この子どもたちが未来を生きる展望がもてる教育活動をさらに進めてまいります。みなさまのご支援をよろしくお願いいたします。

令和7年度 第33回学校心理カウンセラー研修講座 受講報告

◆日 程 令和7年8月5日(火)～7日(木)

◆会 場 サンセール盛岡

◆主 催 公益社団法人 日本教育会

◆研修プログラム

月/日	内 容	講 師
8/5(火)	これからのスクールカウンセリング ～「生徒指導提要」の示す一人ひとりの子どもの支援～	東京成徳大学特任教授 石 隈 利 紀
	学校生活場面を活かした子どもへの援助	東京福祉大学教授 家 近 早 苗
	チーム援助の実践 ～ほんものチーム・なりかけチーム・にせチーム～	東京成徳大学特任教授 石 隈 利 紀 東京福祉大学教授 家 近 早 苗
8/6(水)	社会性と情動の学習～SEL-8Sの考え方と実践～	福岡教育大学名誉教授 小 泉 令 三
	「怒り」感情の大切さと心の健康	東京学芸大学名誉教授 大河原美以心理療法研究室長 大河原 美 以
8/7(木)	発達障害の理解と支援～二次障害の理解も含めて～	筑波大学名誉教授 宮 本 信 也

「第33回学校心理カウンセラー研修講座に参加して」 泉南市立西信達小学校 瀬戸 紀海

私はこの春から、新たに転任校で勤務を始めました。転任は初めてのことで戸惑うことが多く、暗中模索の日々でした。何より子どもの授業に向かう姿勢が前任校と異なり、専科の私としては不安が大きくなる一方でした。そんなとき、今回の講座の案内が目にとまり参加を決めました。特に響いた講義は、小泉令三先生の「社会性と情動の学習～SEL-8Sプログラムの考え方と実践～」と、大河原美以先生の「『怒り』感情の大切さと心の健康」でした。

小泉先生の講義は、現代の子どもたちに不足しがちな「人と人との関わり」を学校で補うことの必要性を説いたものでした。学校で行っていることの重要性を改めて感じ、私自身を顧みる時間にもなりました。大河原先生の講義は心の健康に重点を置いたもので、不快感情の制御やそれに伴った防衛反応、心の変化が身体に引き起こす反応のお話しでした。問題にぶつかると思考を停止してしまう子や、教師を脅威と感じ暴言を吐いてしまう子どもの例が挙げられていました。目の前の子どもたちと重なる部分が多く、疑問に思っていたことが少しずつ整理されていきました。

義務教育での大人の関わりが、どれだけ子どもたちの成長に影響するのを実感させられ、教師が学校で教えることの責任の重さを強く感じました。また、ディスカッションの時間に校長先生や生徒指導の先生、副校長先生など立場の違う先生方とご一緒し、様々な視点からの意見もいただき、大切な出会いになったと感じています。3日間があったという間の充実した研修会でした。学んだことを現場で活かせるように日々励んでいきたいと思っています。

特集

大阪府支部 第75回講演会

日本教育会大阪府支部講演会

人工知能の未来—ChatGPT を超えて

北海道大学教授 川村 秀憲 氏

はじめに

皆さんこんにちは、北海道大学の川村です。本日は「人工知能の未来 ChatGPTを超えて」という題でお話しします。AIは今や日常的に耳にするキーワードで、ChatGPTに代表される大規模言語モデルはビジネスの現場だけでなく、子供たちのスマホにも入っているほど普及しています。一方で、教育の前提と相容れない存在になりつつあることも実感されるでしょう。本日はその課題整理を通じ、教育現場でAIをどう捉えるかのヒントを示したいと思います。

私の研究室は「調和系工学研究室」と言います。人工知能を研究しているのですが、人工知能そのものではなくて、人工知能の技術を用いて、多様な価値観を内包する、個人と社会の意思決定を支援する技術、そういうことを研究しています。「調和系工学」という言葉には、理論だけではなく、AIを社会の中でどう使うと世の中のためになるのか、人や社会と機械・AIとの調和のとれたシステムを作りたい、という思いが込められています。

研究の一つに「AI—茶くん」があります。AIに俳句を作らせ、感情に寄り添う言葉の使い方を探る試みです。松山の俳人の方々と連携しています。複数のテレビ番組でも取り上げていただき、AIが生成した俳句と人間の俳句を見分ける実験などで紹介されました。

人工知能に興味を持ったきっかけと原点

私が人工知能という分野に関心を持ったきっかけは、小学生の頃に家にあったNECのPC-8001というパソコンでした。当時は今のように便利なソフトが最初から入っているわけではなく、電源を入れても「さあプログラムを入力してください」と待っているだけの機械でした。小学校二年生だった私は、ネットもなく、周りに聞ける人もいない中で、雑誌の断片的な情報や数少ない例題を手掛かりに試行錯誤を繰り返しました。何か文字を打ち込むとその通りに動く、そんな仕組みに夢中になり、やがて自分で簡単なゲームを作れるようになりました。

ゲームが動いたときの喜びは大きかったのですが、一方で「自分の想像の範囲内のものしかできない」という物足りなさを感じるようになりました。自分で設計して作れば、結果は予想通り。驚きや発見はなく、当たり前のように動きます。では逆に、自分の想像を超えるもの、自分が考えていなかった振る舞いをする仕組みは作れるのだろうか。小学生ながらにそんな疑問を抱きました。この問いが心に残り、大学進学の際に思い出したのです。「どうや

ら人工知能という分野なら、それができらしい」と考え、北海道大学に進みました。そしてAI研究の道を歩み始めた、これが私の原点です。

大学でAI研究を始めた頃、世界的なニュースが流れました。1997年、IBMが開発したチェス専用コンピュータ「ディープブルー」が、世界チャンピオンのガルリ・カスパロフに勝利したのです。当時の報道は「人類がついにAIの軍門に下った」という少しネガティブなニュアンスを帯びて伝えられました。

しかし私には違って見えました。世界最強のチェスプレイヤーを打ち破ったのは、多くのエンジニアの知恵を結集させた結果で、この構図が大事だと思いました。つまり、人類単独の知恵だけでは解決不可能に思える課題も、コンピュータ・AIと人の知恵、力を結集してAIを作ることによって解決可能だと私は感じたのです。

例えば、地球温暖化や資源・エネルギー問題、水不足、さらには戦争や国際紛争のように、人類だけでは解決が難しい困難が数多く存在します。そうした問題に対しても、AIと人間の知恵を融合すれば、新しい解決策を見出せるのではないかと。世界チャンピオンを倒したときと同じように、協働の力で壁を乗り越えられるのではないかと。

私は修士課程の学生で、当時はAIの「冬の時代」と呼ばれる低迷期が続いていました。この出来事を通じて「自分の選んだAI研究という道はきっと大事な道になる」と確信しました。

人工知能の歴史と発展

人工知能という言葉が生まれたのは1956年のことです。ちょうどコンピュータの発展と歩調を合わせるように誕生しました。当時の研究者たちは、コンピュータを使って人間の知的な情報処理を再現しようと考え、「アーティフィシャル・インテリジェンス（人工知能）」という新しい概念を打ち立てました。

その後、1960～80年代にかけてAI分野では理論的に重要な研究成果が次々と発表されました。特に数学的な理論の基礎研究が進み、人工知能の枠組み自体はこの頃に形づくられました。しかし、当時のコンピュータの性能はまだ低く、実際に学習させてみても思うように動きませんでした。

この間もホップフィールドやヒントンといった研



究者たちが基礎を築き続けましたが、なかなか応用に進みませんでした。のちにノーベル賞を受賞した彼らの研究は、長い停滞期を経て活かされることになります。

大きな転機が訪れたのは2012～13年ごろでした。この時期、二つの条件が整ったのです。一つはコンピューターの処理能力が飛躍的に高まったこと。もう一つはインターネットの普及によって膨大なデータが蓄積されたことです。理論・計算パワー・データ数、この三つが初めてバランスよく揃ったことで、これまで難しいと思われていた画像認識の分野を中心にAI研究が加速し始めます。猫や犬といった対象を写真から正しく識別できるようになり、一気に精度が上がりました。

そして記憶に新しいのが2022年の出来事です。ChatGPTをはじめとする大規模言語モデル、さらには画像生成などの「生成系AI」が登場し、社会全体に強い衝撃を与えました。

強いAI／弱いAI

人工知能とは何か、と問われれば、それは「コンピューターを用いて人間のような知能を実現することを目指す技術の総称」だと言えます。とはいえ「人間のような知能」とは一体何か、その定義は非常に難しい問題です。研究者の間では、本当に人のように考えられるAIを「強いAI (Strong AI)」と呼びます。それに対して、ある特定の課題、例えば画像認識や質問応答といった限定されたタスクを上手にこなせるにすぎないものは「弱いAI (Weak AI)」と区別しています。

現在私たちが日常的に利用しているAI、そしてChatGPTも、「弱いAI」に含まれます。確かにChatGPTは驚くほど自然な会話をこなしますが、研究者の目から見れば、依然として「弱いAI」であり、本当の意味で人のように考えるAIには到達していません。

もし強いAIが実現すれば、いわゆる「シンギュラリティ (技術的特異点)」が訪れるとされています。しかし、そこに至るまでにはまだ時間がかかると考えられています。

ChatGPTの登場

2022年12月にOpen AIがChatGPTを公開し、誰もがアカウントを作って自由に利用できるようになりました。それ以前から研究者の間では「人のように言葉



を操るAIがアメリカで登場しているらしい」と話題になっていましたが、論文を読むだけで実際に試すことはできませんでした。それが一般公開され、しかも日本語にも対応し、誰もが体験できるようになったことで、一気に社会の注目を集めました。

私自身も公開直後に触れてみました。当時のレベルは今とは比べものにならず、「ラッパとは何か」と尋ねると「4本足の動物です」と返ってくる程度でした。

汎用技術

AIは単なる一つの便利な技術にとどまらず、社会の基盤そのものになると考えられています。このような技術は「汎用技術 (General Purpose Technology, GPT)」と呼ばれます。歴史を振り返れば、蒸気機関、電気、コンピューター、インターネットなどがこれにあたり、社会のあり方を根本から変えました。AIも間違いなくその系譜に連なる存在です。

電気を例にとってみましょう。私たちは普段「電気はすごい」とは口にしません。電気そのものを意識するのではなく、冷蔵庫やテレビ、照明やドライヤーといった具体的なサービスや製品を通じて、電気の恩恵を受けています。つまり電気は生活に溶け込み、なくてはならない存在ですが、そのすごさを改めて話題にすることはありません。同じように、現在私たちが「AI ってすごい」「ChatGPT って驚く」と話題にしている段階は、まだ入り口にすぎないのです。

将来は、AIがあらゆる仕組みに組み込まれ、私たちが特別に意識しなくても日常の基盤として機能するようになるでしょう。教育、医療、ビジネス、行政、家庭生活のあらゆる領域でAIが自然に活用され、電気やインターネットと同じように「使って当たり前」の存在になる。これから実現しようとしている世界とは、まさにそういう未来です。

ChatGPTの仕組み：神経細胞の模倣

AI、特にChatGPTの仕組みを理解していないと「嘘をつくのではないか」「人類を滅ぼすのではないか」といった過剰な不安や誤解につながります。ここでは非常に大ざっぱにですが、ChatGPTのベースとなっている原理を紹介したいと思います。

出発点は人間の脳の神経細胞 (ニューロン) です。脳の中の細胞は、樹状突起を通して周囲から電気信号を受け取り、一定以上の信号が集まると細胞体が反応し、軸索という“電線”を通して隣の細胞へ信号を送ります。その途中にはシナプスと呼ばれる仕組みがあり、ここで信号を強めたり弱めたりすることができます。つまり、入力された信号を調整して次の細胞へ渡すというのが脳細胞の基本的な働きです。

ChatGPTの仕組み：数値計算

AI研究ではこの仕組みを大幅に単純化して数学的にモデル化しました。これがニューラルネットワークです。入力された数値に「重み」を掛け、合計して出力へ変換する、基本的には掛け算と足し算を繰り返す仕組みに過ぎません。例えば「2」という信号が入り、シナプスの重みが「 $\times 100$ 」であれば「200」に変換されます。同様に「3」が「 $\times 10$ 」なら「30」、「5」が「 $\times 1$ 」なら「5」といった具合です。これらを足し合わせれば「235」という入力が「235」という出力に変換されますし、重みを変えれば全く違う数値へと変換することもできます。

一見すると単純な処理ですが、この仕組みを何層にも重ね、大規模に展開すると非常に複雑な関数を

近似できるようになります。理論的には「万能関数近似器」と呼ばれ、どのような関数も表現できるという性質を持っています。ChatGPTの内部では、こうした掛け算と足し算の組み合わせが数千億、時には数兆単位で繰り返されています。つまり、人間の脳の働きを完全に再現しているわけではありませんが、膨大な数のシンプルな計算を積み上げることで、人間らしい応答を生み出せるのです。

現在のChatGPTは1000億を超えるパラメータを持っています。これらはすべて「重み」の数値であり、どこでどのように信号を強めたり弱めたりするかを決めています。最終的に私たちが見る自然な文章は、こうした膨大な掛け算と足し算の積み重ねの結果に過ぎません。したがって「魔法のように賢い存在」ではなく、膨大な演算処理によって統計的に最もらしい答えを導き出しているというのが実態です。

このように仕組みを知れば、AIを必要以上に恐れることはありません。確かに規模は人間には想像できないほど大きいですが、やっていることの基本は単純な数値計算の繰り返しです。

ChatGPTの仕組み：続きを予測するトレーニング

ChatGPTというのは「人の質問に答えるAI」と思われがちですが、実際の仕組みは少し違います。皆さんがイメージしやすいのは「質問と答えの組み合わせを大量に覚えておき、それを引き出している」という形かもしれませんが、ですが実際には、もっと単純でありながらも奥が深い方法で作られています。

ChatGPTの基本は、人間が書いた膨大な文章を使って「次に来る言葉を予測する」訓練を繰り返すことです。たとえばブログや小説、ニュース記事などから適当な文章を取り出し、その途中の単語や文を「？」に置き換えて穴埋め問題にします。そしてAIは「この続きをどう予測するか」を学んでいきます。これを何百万回、何億回と繰り返すことで、自然な日本語の続きや文章のパターンを身につけていくのです。

つまりChatGPTは「人の質問に直接答える」ように訓練されているわけではなく、あくまで「文章の続きを予測する」ことを徹底的に学習しているのです。ところが、質問文を入力すると、その続きとして「答えのような文章」が予測されます。ですから私たちには「AIが質問に答えている」と見えるのです。

もちろん、うまくいかない場合もあります。質問を入れたのに「続きの質問」を予測してしまうこともあるのです。そこで重要なのが人間のフィードバックです。人が評価者として加わり、「正しく答えたら褒める」「見当外れなら叱る」という仕組みを取り入れます。実際には数値の重みを調整する操作ですが、この繰り返しによって、質問に答える力が磨かれていきます。

ChatGPTの多様な知的処理能力

このようにして出来上がったのが、現在私たちが使っているChatGPTです。では、これで実際に何が

できるかというと、本当に多様です。例えば「小学生になったつもりで桃太郎の作文を書いて」と入力すると、素朴な言葉で「桃太郎って強くて正義の味方で、僕もなりたい」といった作文が数秒で出てきます。今度は「大学教授になったつもりで」とお願いすると、「桃太郎に見る文化的価値と教育的意義」といった小難しい論文風の文章を書きます。さらに「ギャルになったつもりで」と入力すると、「桃太郎マジでカッコいい！きゅんとする！」といった軽快な感想文が出てきます。

これらの例は一見すると遊びのように見えるかもしれませんが、よく考えると非常に高度な知的処理を行っていることがわかります。桃太郎の物語を理解しているだけでは足りません。「小学生らしい言葉遣い」「大学教授らしい論調」「ギャルっぽい口語表現」といった文化的・社会的な文脈を踏まえ、それを文体として再構成し、違和感なく表現する必要があります。単にストーリーを知っているだけではできません。その役割を演じながら自然な日本語にまとめあげる処理は、私自身「自分で書け」と言われても難しいと感じます。

では、創造的なことはどうでしょうか。人とAIの違いとして「創造的なことは人間にしかできない」と言う人がよくいますが、実際にはそうとも限りません。たとえばChatGPTに「桃太郎を未来のSFの物語に作り変えてください」と指示すると、数秒から数十秒で未来版の桃太郎のストーリーを生成します。鬼を改造人間に置き換えるといった設定も含めて、さらっと物語を作り出すのです。もし気に入らなければ「別のストーリーを」と頼めば、また新しい物語をすぐに生成してくれます。

さらにChatGPTに「あなたは小学生にわかりやすく科学を教えるおもしろ科学博士です」と役割を与えたうえで、「空はなぜ青いのですか」と尋ねてみました。これは大人でも説明が難しい問いですが、ChatGPTは「いい質問ですね」と返し、太陽光に含まれるさまざまな色やレイリー散乱の仕組みを小学生にも理解できるように解説してくれます。そして「星はなぜ瞬くのか」「オーロラはどうできるのか」「虹はなぜできるのか」など、さらに学びを広げるきっかけを与えてくれるのです。今やこうした高度な知識を子どもたちが持つスマホから簡単に引き出せる時代になっています。

また、ChatGPTに「モグラ叩きのゲームをプログラミングしてください」と一文指示すると、数秒で動作可能なプログラムを生成します。実行すると茶色い四角をクリックして得点を競う簡易ゲームが動作します。これは、私が子どもの頃に夢見たことで、「自分で作りたい」と思ったことが、今やAIを通じて一瞬で実現できるようになったと驚きました。

原理を理解したうえで実際に動かしてみると、その結果は想像を超えるものとなります。現役で研究を続けるこの時代にこうした技術に立ち会えることを、とても幸運に感じています。



「ハルシネーション」と呼ばれる現象

先にお話しした通り、ChatGPTの仕組みは大量のテキストを学習し、次に来る言葉を予測するものです。学習したデータをそのまま引用するのではなく、膨大な足し算や掛け算の計算結果として知識が内部に埋め込まれており、そこから予測が行われます。イメージとしては、持ち込み禁止の試験を受ける学生にたとえられます。知っている問題は正しく答えられますが、わからない問題には苦し紛れでも何かを書いて空欄を避けます。その結果、間違いも出てきますが、それは仕組み上当然のことです。これが「ハルシネーション」と呼ばれる現象です。

ただし、最新のChatGPTは大きく進歩しています。持ち込み禁止の試験で無理に埋めるのではなく、わからない場合にはWebや百科事典、辞書などを調べ、その内容を要約して回答を提示するようになりました。つまり、「いろいろ調べ、その情報を基にまとめた答えはこれです」という形で応答する仕組みに変化しているのです。この進歩によって精度や信頼性は向上しており、AIはより実用的な道具へと進化しています。

プロンプトエンジニアリングの重要性

AIをビジネスで活用する際に大切なのは、従来のコンピューターのように必ず正解を返すわけではないという点です。ChatGPTのような大規模言語モデルは、ときに間違った答えや不正確な出力をすることがあります。ですから「誤りを含むもの」と理解した上で使うことが前提になります。

そこで重要になるのが「プロンプトエンジニアリング」です。AIは文章の続きを予測する仕組みなので、質問の前半に十分な情報や役割を与えると精度が上がります。たとえば「あなたはおもしろ科学博士です」と設定して質問すれば、それに合った回答を返しやすくなります。逆に曖昧な問いかけでは良い答えは得られません。

面白いことに「落ち着いて考えてみて」と指示すると精度が上がることも知られています。人間のようになにに落ち着いているのではなく、学習した文章の中で「落ち着いて考える」と続く部分が論理的で丁寧な文脈を持つため、その性質を反映しているのです。

つまりAIを恐れる必要はなく、仕組みを理解すれば「どう入力するか」で結果をコントロールできる道具だと分かります。

ChatGPTの実力

ChatGPTが実際にどの程度役に立つのかについては、現在さまざまな研究が進められています。たとえばハーバード大学の研究成果によれば、コンサルティング業務にChatGPTを活用した場合、情報収集や要約、新しいアイデアの提案といった作業において、生産性が12%向上し、タスクの完了速度は25%速まり、成果物の品質も40%向上することが報告されています。

私自身も論文をChatGPTに入力し、「この内容を一言で要約してほしい」と依頼したことがあります。英語で書かれた数十ページに及ぶ論文でした

が、わずか20～30秒で端的にエッセンスをまとめてくれました。日頃から大量の英語論文を読まなければならない研究者にとって、このような機能は非常に有用です。

教育現場に関しても注目すべき事例があります。ChatGPTに大学入試共通テストを受験させた結果が報告されているのです。1年半前のバージョンでは、総合得点率がおおよそ6割強であり、これは受験生の平均点と同程度でした。ただし、数学に関しては弱点が明らかになりました。これは仕組みを理解していれば納得できる話です。ChatGPTは「文章の続きを予測する」モデルなので、英文法や社会科のように文脈から答えを推測できる問題には強いのですが、数値計算を伴う数学には不向きだったのです。

しかし、その後に登場した「ChatGPT-o1」では大きな改善が見られました。このモデルは、単に答えを出すのではなく、複数の解法を想定して順序立てて自己問答を行い、異なる解法で同じ答えが得られるかを確認してから出力する仕組みを取り入れました。これにより、推論力が飛躍的に向上したとされています。実際、アメリカの博士課程レベルの実力テストでは、7割ほどの学生を上回る成績を示したという報告もあります。

さらに、今年1月に実施された大学入試共通テストにこの新しいバージョンを挑戦させたところ、総合得点率はおおよそ9割に達しました。数学も8～9割の正答率を記録し、以前の弱点を克服しています。共通テストで9割といえば、東京大学を受験できるレベルです。

教育現場で直面する状況

先日、北海道大学の入試問題をChatGPTに解かせてみました。文系数学の問題を画像で与えたところ、わずか十数秒で全問正解。現在の実力はそのレベルに達しています。

私は大学で入試監督をすることがありますが、受験生には「スマホは電源を切ってカバンにしまうように」と指示します。そして鉛筆と消しゴムだけで2時間、これまで12年間勉強してきた力を発揮して解いてもらうわけですが、白紙解答も少なくありません。ふと「さっきしまわせたスマホに聞けば全員が100点なのに」と思う瞬間があります。スマホに聞けば一発で答えが出る時代に、12年間かけて学んだことの意味は何なのだろうか、と。

今やChatGPTは北大入試の数学を満点で解けるまで進歩しています。つまり「知識を教えて覚えさせる」ことだけでは教育の意義が揺らいでしまうのです。子どもたち自身も「勉強してもスマホに負ける」と感じるでしょう。

しかし一方で、AIは単に答えを返すだけでなく、「この解法がわからない」と質問すれば丁寧に説明してくれる存在でもあります。もちろん誤答の可能性は残りますが、教育現場はこうした新しい状況に直面しているのです。

ビジネスとAI：社会で求められる姿勢

このAIについて、少し視点を変えてビジネスの現場での状況を見てみたいと思います。私はさまざま

な企業で顧問やアドバイザーを務めています、ほとんどの会社で議論されているのは「業務の中でAIをどう位置づけ、どのように活用していくか」という点です。

もし人が行っている業務を、AIが同じクオリティで代替できるのであれば、AIに任せた方が圧倒的にコストは低くなります。たとえばChatGPTの有料版を利用しても月3千円程度であり、大学共通テストで9割の成績を出せるAIを月数千円で使えるわけです。その力を業務に生かさない理由はありません。

実際、ビジネスの現場では「AIをどう業務に組み込み、生産性を高めるか」が大きなテーマになっています。もちろんAIですべてを解決できるわけではありませんが、副操縦士のように「AIコパイロット」として使いこなし、業務を効率化する方向が広がっています。

具体例として、アメリカのマイクロソフトはAIにプログラムを作らせることができるようになった結果、大規模な人員削減に踏み切り、約9000人を解雇しました。日本ではこのような大規模なレイオフは容易ではありませんが、アメリカでは可能です。最先端のAIを開発している企業自身が「これだけ人員は不要」と判断して削減に踏み切っているのは、象徴的な出来事だといえます。

一方で教育の場では「AIに頼らず、自力で考えることが大切」と言われます。しかし、学生が卒業して社会に出れば、求められるのはまさにその逆です。AIをどう使いこなし、効率的に仕事を進めるかが問われるのです。自分の力だけで頑張っても、時間がかかったり精度が低かったりすれば、評価されません。

つまり、頭を鍛えることはもちろん大切ですが、「AIを使うと頭が鍛えられない」といった発想のままでは、将来的に時代に取り残されてしまう危険性があります。むしろAIを適切に活用し、生産性を高めて成果を出せることこそが社会で求められる力なのです。

教育現場でのAIの活用

AIの能力がどこまで上がるかは予測できませんが、イーロン・マスクは「あと1～2年でAIは人を超える」と述べています。すでに大学入試レベルでは、共通テストで9割、北大入試でも満点を取れる実力が示されており、受験勉強という意味では多くの人を超えている状況です。

そのため「宿題やレポートをAIでやるのは是非か」がよく話題になります。答えが決まっていれば採点可能な課題では、AIが解答すると成績評価が揺らぐため「けしからん」となるわけです。一方で大学の研究のように「まだ誰も答えを知らない課題」に挑む場合、AIはむしろ有効なツールになります。私は学生に「まずAIに相談したか」とよく言います。AIで解決できるならそれでよく、難しい部分は教員と議論すればいい。AIは敵ではなく共に研究を進め



る道具だと考えています。

ただし、試験となると事情は別です。学生が「自分では解けないけれどAIが答えました」と提出しても、学力評価にはなりません。つまり、教科書的な課題やテストとは相性が悪いですが、社会で必要とされる「答えのない問題」を考える場面では、AIは欠かせない存在になっていきます。

この状況は昔の「電卓を使ってよいか」という議論にも似ています。例えば人間なら140億年かかる計算をスーパーコンピュータなら1秒で解ける。実際に世界中のパソコンをつないで60年間解けなかった難問を解いた事例もあります。手計算にこだわることも、人類全体の知を前進させることが重要だという視点が必要です。AIも同じで、使うことを禁じるのではなく、どう活かすかが問われているのです。

加速するAIの進化

では、AIは今後どれほど進化していくのでしょうか。その見通しを考える上で、よく引き合いに出されるのが「ムーアの法則」です。これは1970年代にインテル創業者の1人ゴードン・ムーアが提唱したもので、半導体チップに搭載されるトランジスタの数は18か月ごとに2倍になるという経験則です。実際、コンピュータの心臓部であるプロセッサはこの法則に沿って進化し、過去数十年にわたり計算能力が飛躍的に向上してきました。スマートフォンの通信速度やメモリ容量なども同様の傾向を示し、テクノロジー全般が指数関数的に成長していることがわかります。

AIの能力も、この流れと同じように急速に進歩しています。たとえば、わずか2年半前のChatGPTは「ラッパは4本足の動物です」といった誤答をするレベルでしたが、1年半前には大学共通テストで受験生平均点と同等の力を示すまでに成長しました。そして半年前には東大生レベルにまで到達し、すでに難関大学の入試問題を解ける段階にきています。

このペースを考えると、あと1～2年でペーパーテストの類ならほぼ満点を取れるようになると予測されます。そうすると「AIに聞けば正解がわかるのに、人間が自力で解く意味はあるのか」という根本的な問いが社会に突き付けられることになります。勉強や学びの意義は失われるのか、それとも別の価値がそこに見いだされるのか。こうした議論が避けられない時代になってきました。

さらに進化はソフトウェアの範囲にとどまりません。イーロン・マスク率いるテスラ社が開発している人型ロボット「オプティマス」では、単に人のように動くだけでなく、片付けや物の整理といった実作業ができる様子がすでに公開されています。かつて日本でも「ペッパー」や「アシモ」といったロボットが注目を集めました。それらとは比べ物にならないほど実用性を備えた存在です。しかも頭脳にはChatGPTと同じ仕組みを持つAIが搭載されており、人間の問いかけに自然に答えることもできます。

テスラはこのロボットを量産し、1体あたり300万円程度で世界に普及させる計画を公表していま

す。もしこれが実現すれば、AIが言葉で答えるだけでなく、実際に体を持って作業をする時代が到来するのです。

AIに代替されない領域

そういう中であって、では私たち人間は何を考えればよいのでしょうか。特に子供たちは何を考えればよいのでしょうか。これには明確な答えはありませんが、私なりの考えを少し述べたいと思います。

AIは急速に進化していますが、すべてがAI化されていくわけではないと私は考えています。ChatGPTの開発には数千億円規模の費用が投じられたとされ、経済合理性が重要になります。つまり、莫大な開発費をかけても世界でほとんど売れない分野にはAIは投入されません。AI化が進むのは、入力と出力が定型的で、誰がやっても同じ答えになるような仕事です。世界中で広く需要があり、置き換えが経済的に合理的な領域こそ優先されます。一方で、主観的な判断や、その人にしかできない判断が必要な分野は、AIで代替するのが難しく、開発の対象にもなりにくいのです。

結局AIが得意とするのは、世界中で共通に学ばれている知識ベースの仕事です。言い換えれば、学校の勉強そのものです。人間は生まれたときに知識がゼロなので、同じ教科書で学び続ける仕組みが教育として成り立ってきました。それは社会や企業を支えるために必要で、知識を持つ人材は高い報酬を得られたからです。

しかし今では、ChatGPTが共通テストで9割を超え、北大入試も満点を取れる水準になっています。つまり、その能力は「試験で点を取るため」ではなく、「世界中に提供できる価値」として成立しており、AIが人と同じ答えを導く力を持った以上、人間はその領域でAIと競争せざるを得ない状況になっています。

とはいえ、すべてがAIに置き換えられるわけではありません。たとえば芸術や俳句などの創作は、AIが生成できても「誰が作ったか」に価値が宿る場合が多く、人の人生や価値観に基づく判断は代替できません。そんな領域のAIを作っても採算が取れず、人が担う意味は残ります。

また、多くの現実の課題には「唯一の正解」がありません。引っ越し先を選ぶとき、家賃や広さ、治安など複数の要素を考慮し、最後は自分で決断します。大きく言えば職業選択や結婚、小さく言えば今晚の夕食なども同じです。AIが提案や助言をしても、最終的に責任を持つのは本人であり、こうした意思決定は人に残され続けるのです。

結局、最後は自分で決めるしかない問題が世の中には多くあります。たとえば「美味しいとは何か」を辞書で引いても循環的な定義に行き着き、本質はわかりません。しかし3歳児がチョコを食べて「おいしい」と言うように、経験的・生物学的な反応がそこにあります。美味しさは栄養や子孫繁栄につながる嗜好としてDNAに刻まれており、言葉だけで完全に説明できるものではないのです。

人間ならではの価値

現在の言語モデルは言葉を学習して反応できますが、「幸せ」「心地よさ」「美味しさ」といった感覚や価値の本質を体験的に理解しているわけではありません。真似はできても、実際に味わって得られる内的な意味や感情を持っているわけではない。したがって、こうした主観的・経験的な判断は人間にしか担えない領域が残ると考えられます。

「推し活」という言葉がありますが、たとえば藤井聡太さんはAIより将棋は弱くても、人だからこそ応援したいという価値があります。人がやることに意味がある、応援されること自体が人間ならではの役割なのです。また、高級レストランのウェーターがロボットだったら雰囲気が壊れるように、人が担うことに贅沢さや価値が残る分野もあります。さらに、倫理や法律、憲法のような規範は、人が社会的・本能的に考えて決めるべき領域であり、AIに委ねることはできないと思います。

AIに何でも聞ける時代ですが、人の共感や感受性はやはり人間ならではの強みです。特に教育では、大人が教えること自体に意味が残ると思います。サインコサインが必要かという議論もありましたが、研究者にとっては不可欠な基礎です。ただ計算方法を教えるだけでなく、なぜ学ぶのか、学ぶことの意義を伝えることが大事ではないでしょうか。AIは「楽しい」と感じられませんが、人間は経験や感情を通して学ぶことに価値を見いだせるのです。

AIに何でも聞ける時代ですが、人の共感や感受性はやはり人間ならではの強みです。特に教育では、大人が教えること自体に意味が残ると思います。サインコサインが必要かという議論もありましたが、研究者にとっては不可欠な基礎です。ただ計算方法を教えるだけでなく、なぜ学ぶのか、学ぶことの意義を伝えることが大事ではないでしょうか。AIは「楽しい」と感じられませんが、人間は経験や感情を通して学ぶことに価値を見いだせるのです。

調和系工学の目指す未来

私の研究室「調和系工学研究室」は、AI対人間の対立構図ではなく、AIと人間が協働するあり方を追究しています。単に「AIを使わずに何かを成し遂げる」ことを美德とするのではなく、AIを道具として活用しつつ、人間にしかできない領域——容易には答えが出せない難題への挑戦や、人間らしい問いに対する深い洞察——に取り組むことが重要です。これからは、AIと手を取り合いながら独自の価値を生み出せる人が社会で求められる時代になると考えています。

テクノロジーは急速に進化し、ChatGPTも短期間で大きな成長を遂げました。世界で共通して必要とされる能力は次々とAIに置き換えられ、従来の価値観は通用しなくなっています。特に若い世代は私たちとは全く違う環境で生きていくことになります。大人は「昔はこうだった」と押しつけるのではなく、新しい挑戦を見守り、支える姿勢が大切です。これからは人とAI、機械が調和する世界が当たり前となり、その中で自分の存在価値をどう発揮するかが問われていくでしょう。



令和7年 第50回全国教育大会大阪大会 報告

大会主題「自らの頭で考え判断し表現する力を育てる教育」

- ◆主 催 公益社団法人 日本教育会
- ◆日 程 令和7年 11月1日（土）
- ◆会 場 大阪工業大学 梅田キャンパス OIT 梅田タワー 常翔ホール

11月1日（土）、「第50回全国教育大会大阪大会」が開催され、全国からオンライン参加を含めて約500名の参加がありました。

本大会では、日本教育会の強みである幼こ・小・中・高・特支の各校種から提言発表がありました。また、家庭・地域社会の部門では熊本市内の5高校で組織された熊本魅力推進生徒会から、地域の活性化に向けた取組み「若者が主役のまちづくりを熊本から」の発表がありました。現役の高校生による発表は今回が初め

てで、会場は大いに盛り上がりました。大阪からは苅野大志氏（堺市立庭代台中学校主幹教諭）が、『読みの対話的生成を軸とした文学教材の授業の方向性』～中学1年『小さな手袋』の発話分析を通して～』をテーマに提言発表をされました（内容は次ページに掲載）。

記念講演では、大阪府支部の第71回講演会で講師を務めていただいた竹内和雄氏（兵庫県立大学環境人間学部教授）に、「AI時代の教師が知っておくべきこと」との演題で講演いただきました。

朝から、副支部長・理事の皆さま、そして、企画運営委員、広報委員、終身会員運営委員の各委員の皆さまなど多くの方に準備や受付、会場整理などお手伝いをいただき、成功裏のうちに大会を終えることができました。ありがとうございました。



開会式



受付



提言発表



記念講演 謝辞



会場全体



閉会式



読みの対話的生成を軸とした文学教材の授業の方向性 — 中学1年「小さな手袋」の発話分析を通して —

大阪府堺市立庭代台中学校 主幹教諭 苅 野 大 志

1. はじめに

近年の国語科における文学教材の授業では、「言語活動の充実」が教育のメルクマールとされ、作品内容の伝達ではなく、学習者による読みの生成や交流を促す学習の開拓が求められてきた。

山元隆春（2000）は、そうした読者の積極的な役割を重視する文学教育論の展開が、「読者の自由な読みを擁護すべきか、テキストの『正確な』読みを尊重すべきか」という、文学教育における重要な論点を生んできたと指摘し、「そのような二項対立的枠組みを未だ捨て去ることができていない」ことに文学教育の課題があると述べている。

また、水野正朗（2008）は、教育現場の実際において、「教師の解釈（権威者の解釈・指導書の解釈）に巧みに誘導する指導方針」と「自由な読み（放任的な読み）を許容する指導方針」とのあいだで揺れ動いている現状を指摘し、読みの指導におけるスタンスの不確かさや葛藤の存在を示唆している。

では、このような二項対立的の問題を乗り越えるために、読みをどのように捉え直し、授業に位置づけていけばよいのだろうか。国語教育においては、読みは変容を伴う動的な過程として捉えられてきた。読みとは、児童生徒や教師が作品や他者との対話を重ねる中で、自らの解釈を絶えず更新していく営みである。作品や他者との対話を通じて読みの変容を支える文学の授業を実践することにより、教材の意味が恣意的に制限なく解釈されるようなアナキーな読みを避けつつ、主体的な読み手を育てる授業の在り方が明らかになってくる。

こうした読みの過程を支える空間として、教室という場の特性に着目する必要がある。教室は、社会的文脈の中で用いられる話し言葉を通して自己の思考を表現し、他者との相互作用が展開される社会的相互行為の場であり、学習者が新たな意味世界を形成していく空間として機能している。とりわけ文学教材の読解においては、登場人物の心情や物語の主題、描写の意味などをめぐって多様な解釈が生まれるため、他者との対話を通じて視点が揺さぶられ、読みが再構成されていく場となりうる。特に少人数グループでの対話は、生徒が発言しやすく、意見を伝え合いやすい環境であることから、自らの読みを共有・調整する中で、他者の見方や語りによる影響を受け、自身の読みを再構築していく可能性が高い。

2. 提言

こうした対話的な読みの可能性に着目し、文学教材に取り組む少人数グループでの読みの合意形成過程を、社会的相互作用の観点から詳細に分析した。この実践分析に基づく知見から、以下の二点を提言として示したい。

提言(1) 読みが変容することそのものに価値を認めることで、二項対立的枠組みを乗り越える授業実践の可能性が拓かれる。

提言(2) 読みの変容を持続的に促すためには、学習者同士が互いの解釈に触れ合い、思考を深め合う場として、少人数のグループ討議を積極的に位置づける必要がある。

3. 実践事例

3-1. 対象者および作品

A 市立 B 中学校 1 年生 63 名（1 組 32 名、2 組 31 名）。2024 年 11 月に内海隆一郎「小さな手袋」（三省堂「現代の国語 2」所収）を全 7 時間で実施。なお、一連の授業は筆者が担当した。

3-2. グループ討議に至る授業の構成

本実践では、全 7 時のうち、第 7 時におけるグループ討議について分析した。第 7 時では、第八場面の範読を行った後、病院を辞したシホが「雑木林へ行きたい」と述べた場面を確認した。これを踏まえて、「シホは雑木林で何をするつもりだったのか」と問いを提示し、さらに「シホは雑木林で手袋をどうするつもりだったのか」という問いへと発展させ少人数グループでの話し合いを実施した。

3-3. 分析対象

分析の対象としたのは、各学級 6 班のうち、グループワークの中でも特に議論のやりとりが活発に見られた 2 つの班である。

一方の班では、班員が納得できない意見に対して、独話的かつ説得力に乏しい発言が続く中で、最終的な意見を導き出す様子が見られた。もう一方の班では、説得力のある意見を班員全員で共有し、相互に意見をブラッシュアップしながら合意形成を進めていた。

この 2 つの班の比較を通して、他者の意見をどのように取り込みつつ、自身の読みを形成してい

くのかという点に注目し、社会的相互作用の観点から話し合いの過程を分析した。

3-4. 発話プロトコル

分析対象とした二班のうち、2組2班の発話プロトコルの一部を以下に示す。

- ① S1: おばあちゃん探して見つけて、手袋返すねん。
 ② S3: なんで返すん? 使ってあげた方がおばあちゃんは嬉しいで。
 ③ S1: なんで、汚れて嬉しいがらん?
 ④ S4: 汚れたって…。一回考えてみて。自分がさあ…
 ⑤ S3: 何で逆に使わへんの?
 ⑥ S1: どうやって使うん?
 ⑦ S4: 手袋やから。
 ⑧ S1: 手袋ちっちゃい。
 ⑨ S3: 付けてるやん。ちっちゃい手袋両手に包めてるやん。
 ⑩ S1: いや、だから、こんな受け取れない。ありがとうみたいな。
 <中略>
 ⑪ S3: ありがとう。返すわって?
 ⑫ S2: もっとちょっとでかいの作ったらいいねん。
 ⑬ S3: ありがとうな! って?
 ⑭ S1: そんなじゃないねん。だから…
 ⑮ S4: おばあちゃん悲しむで。
 ⑯ S5: 無駄に作らせたみたいになる。
 ⑰ S3: シホのために作ったのにさ、なんでシホが使わへんねん。
 ⑱ S1: だから、そうじゃない。
 ⑲ S3: 飾ったらいいやん。
 ⑳ S1: だから、こんな受け取れないよ。みたいな。こんな凄
 いものは受けとれない。
 <中略>
 ㉑ S5: なんで受け取られへんの?
 ㉒ S4: 受け取らなさ、おばあちゃん悲しむやん。
 ㉓ S5: そうやん。悲しむやん。
 ㉔ S1: なんで? こんな凄いののは受け取れないよって。
 ㉕ S4: いや、だから…
 ㉖ S5: 「だから」じゃないやろ。
 ㉗ S3: 「あら、シホちゃん、そんなこと言ってくれたの」みたいな?
 ㉘ S5: え? 持って帰るん?
 ㉙ S1: おばあちゃん、持って帰るねん。
 ㉚ S3: 思い出ももとも消しちゃうってこと?
 ㉛ S4: どっかっていうと、まだ、あの、埋めるとかやったら
 わかるで。

S1による「手袋を返す」という解釈に対して、S4は発話⑩において、「手袋を雑木林に埋める」という新たな解釈を提示した。この「埋める」という行為は、「いったんは手袋を受け取らなければおばあさんが悲しむ」という感情と、「あまりに大切なものを手元に置いておくことができない」という思いとが交錯するなかで、両者を折衷する形で生まれたものであると考えられる。「手袋を受け取らなければおばあさんが悲しむ」の感情は、S3による発話②「使ってあげた方がおばあちゃんは嬉しいが」という発言の影響を受けており、「大切なものを手元に置いておくことができない」との思いは、S1が発話⑩において述べた「こんなすごいものは受け取れない」という発言に由来している。つまり、S4の「埋める」と

いう解釈は、他者の発話との相互作用の中で形成されたものであり、それまでの議論の積み重ねの上に構築されたものであると言える。それまでの議論を通して、S4の内に「おばあちゃんを悲しませたくない」という思いと、「手袋を持っていることはできない」というイメージが作られ、それらを統合する解釈としての「手袋を埋める」という解釈が形成された。

この「埋める」という新たな解釈の形成には、「返す」ことに関する議論が欠かせなかった。自身の意見を簡単に撤回しなかったS1の頑張りが「埋める」を生み出すきっかけになっていたとも言える。

紙幅の都合上、他のプロトコルは掲載できないが、発言内容を精査すると、学習者が他者の意見に触発されながら、自身の解釈を段階的に形成していく様子が見えてきた。発言されながらも最終的に採用されなかった意見も、残された意見に吸収・統合される形で議論に取り込まれており、一見停滞しているように見える場面においても、新たな読みの構築に向かう可能性が存在していたことが確認できた。

4. 終わりに

本稿では、社会的相互作用の枠組みから生徒の発話を分析することで、グループ討議における読みの変容の価値を再評価することを試みた。そこでは、自らの考えを表明し、他者との相互作用を重ねる過程を通じて、新たな情報が共有され、それが内面的に取り込まれながら相互に影響を及ぼし合い、新たな意味世界が協働的に構築されていく様相が確認された。

分析を通じて、文学教育における二項対立を乗り越える方策として、グループ討議における生徒の読みの変容に着目した授業の方向性を提案した。

読みの変容を肯定的に捉えるこの視点に立脚した授業づくりは、「正解」を超えた意味の共有や、多様な価値の生成を支える可能性をもっている。今後は、こうした読みをいかに継続的に促し、評価していくかについて、実践と理論の往還を通じて検討を深めていきたい。

編集後記

秋も深まる中、「会報大阪」第109号の編集を終えることができました。ご多忙の中、快くご執筆くださった皆様に心より感謝申し上げます。ICTを活用した対話的で深い学びの実現に向け、産官学が連携して子どもたちの可能性を広げる動きが広がっていることを実感いたしました。

また、第50回全国教育大会大阪大会に多くの先生方にご参加いただき、重ねて御礼申し上げます。

寄せられたご意見を今後の活動の充実にかかしてまいります。

・今年度の広報委員は以下の通りです。

委員長 前田 善久(中)

副委員長 奥田美菜子(高) 野間 浩一(小) 森本 清音(中)

委員 阪本 友輝(中) 西野 直美(中) 杉本 政信(小)
 安満 規代(中)